群馬県前橋市

亀里銭面Ⅱ遺跡

産業振興支援施設造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序　文

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる水と緑にあふれた地であります。

前橋は古代よりの豊かな文化あふれる地であり、東国の奈良と称されています。今から２万８千年前の旧石器を始めとして、10基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの近代化を示す昭和庁舎等の近代化遺産など多くの文化財が残されています。

自然環境に恵まれたこの地では、古代からの人々の生活の跡が市内のほぼ全域に残されています。古代の人々の暮らした家の跡、使った石器や土器などの道具や、水田跡なども多く、毎年の埋蔵文化財発掘調査により多くの新しい発見があります。

本年度産業振興支援施設造成に関連して調査を行った亀里町周辺は、前橋市南部の水田地帯にありますが、近年の調査で周辺から縄文時代から中世に至る人々の生活の跡が多く発見されています。

亀里銭面Ⅱ遺跡では、平安時代の水田跡など多くの遺構を検出し、地区の歴史解明に貴重な資料を得ることができました。

発掘調査にあたりまして、ご協力をいただきました前橋市土地開発公社、地元関係者、酷寒・強風のなか調査に従事されました皆様に感謝とお礼を申し上げます。

平成13年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　阿部明雄

例　言

1．本書は産業振興支援施設造成に伴う亀里銭面Ⅱ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　阿部明雄）が前橋市土地開発公社から受託したもので、再委託を受けた山武考古学研究所が前橋市教育委員会の指導のもとに実施した。

3．遺跡の所在地・調査面積・調査期間並びに担当調査員は次の通りである。

所 在 地　群馬県前橋市亀里町874番地外

調査面積　約1,282m²

調査期間　平成12年11月21日～平成13年3月16日

調 査 員　大越直樹・千葉孝之（山武考古学研究所）

4．本書の執筆は、第1章を前橋市教育委員会の眞塩明男が、第2～5章を大越が執筆し編集した。

5．調査に際しては下記の諸機関にご指導・ご協力を頂いた。

前橋市教育委員会　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　㈱東日本重機　㈲J・T空撮

㈲新成田総合社　開成測量㈱

6．遺跡の出土遺物・写真・図面等の資料は、前橋市教育委員会が保管している。

凡　例

1．挿図中に使用した方位は座標北である。

2．挿図第1図には建設省国土地理院発行2万5千分の1地形図『前橋』・『高崎』、第2図には明治21年陸地測量部発行2万分の1地方迅速図『倉賀野驛』、第3図には前橋市都市計画課発行の2千5百分の1現地形図『75』を使用した。

3．本書では次のように表示した。

亀里銭面Ⅱ遺跡－12G49　土坑－D　溝－W　浅間A軽石－As-A　浅間B軽石－As-B

浅間C軽石－As-C　榛名二ツ岳渋川テフラ－FA

4．掲載したスクリーントーンは以下を示す

…As-B　
…FA　
…地山

目　　次

序文
例言・凡例
第１章　調査に至る経緯……1
第２章　遺跡の位置と環境……1
第３章　調査の方法と経過……3
第４章　検出された遺構と遺物……5
第５章　まとめ……9
抄録

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡……2
第２図　遺跡の位置……2
第３図　調査範囲とグリッド設定図……3
第４図　基本土層……4
第５図　遺構全体図（１）……6
第６図　１号さく状遺構……7
第７図　11・12・13号溝……8
第８図　遺構全体図（２）……10
第９図　水田跡畦畔と水口……11
第10図　水田跡の凹凸面……12
第11図　１・２・３・４号土坑……12
第12図　１・２・３・４号溝……13
第13図　出土遺物……14

表 目 次

表１　周辺遺跡……1
表２　遺構一覧表……14

図版目次

図版１　遺跡周辺、遺跡遠望
図版２　調査区北側(1)、調査区東側(1)、１号さく状遺構、調査区北側(2)
図版３　調査区東側(2)、２・３・４号土坑付近、２・３・４・５号畦畔、７号畦畔付近の水口
図版４　９号畦畔付近の水口、水田跡の凹凸、１号土坑、出土遺物

第1章　調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は、産業振興支援施設造成に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成12年11月から平成13年3月にかけて行われた。

平成12年10月13日付けで前橋市土地開発公社　理事長　都木一年より前橋市教育委員会に産業振興支援施設造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が提出された。これを受け平成12年11月15日に前橋市土地開発公社と前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団との間で委託契約を締結した。また、同年11月21日に当調査団と山武考古学研究所との間で発掘調査・整理作業の実務についての再委託契約を締結し、現地での発掘調査を開始した。遺跡名称は『亀里銭面Ⅱ遺跡』とし、遺跡略称は『12G49』とした。なお、『亀里』は現在の町名を『銭面』は旧地籍の小字名を採用している。

第2章　遺跡の位置と環境

亀里銭面Ⅱ遺跡は群馬県前橋市亀里町874番地外に所在し、JR前橋駅よりほぼ南方向に約5.4km、利根川左岸の前橋台地上に位置する。隣接する遺跡としては市道を挟んで南側に亀里銭面遺跡(2)が所在する。周辺地区では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺跡の存在が確認されている。

縄文時代では、遺構の伴う横手早稲田遺跡(10)、土器を出土している徳丸仲田遺跡(21)、横手湯田Ⅴ遺跡(14)などがある。

弥生時代には、後期集落跡の櫛島川端遺跡の所在が確認されている。

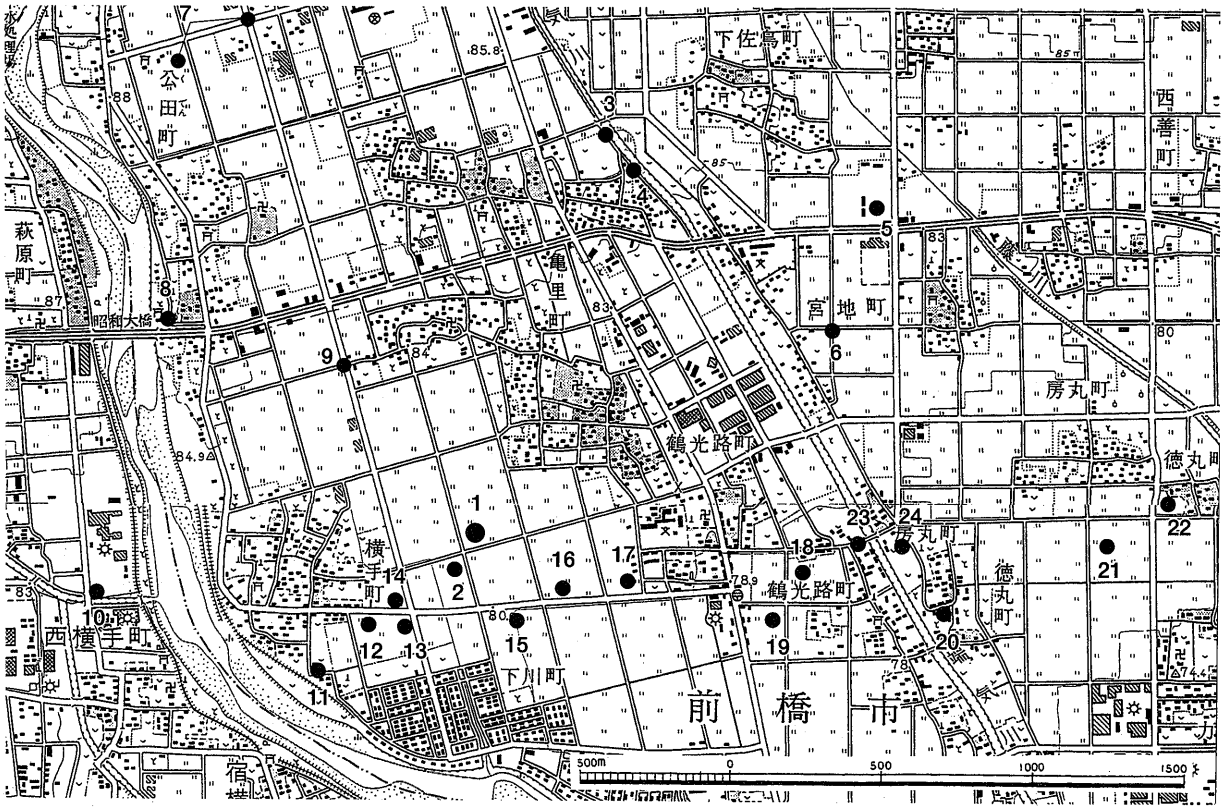
古墳時代には、集落跡、水田跡、墓（方形周溝墓・古墳）などの遺跡が確認されている。特に水田遺跡は、西横手遺跡群(9)や、横手湯田遺跡(15)で確認され、時期は前・中・後期にわたって耕作されていることが判明している。

奈良・平安時代には条里制に基づく水田開発が進む。条里的な区割りは平安末期にも続くが、浅間山の噴火によるテフラ（As-B）で埋没し、本遺跡でも水田跡が検出された。

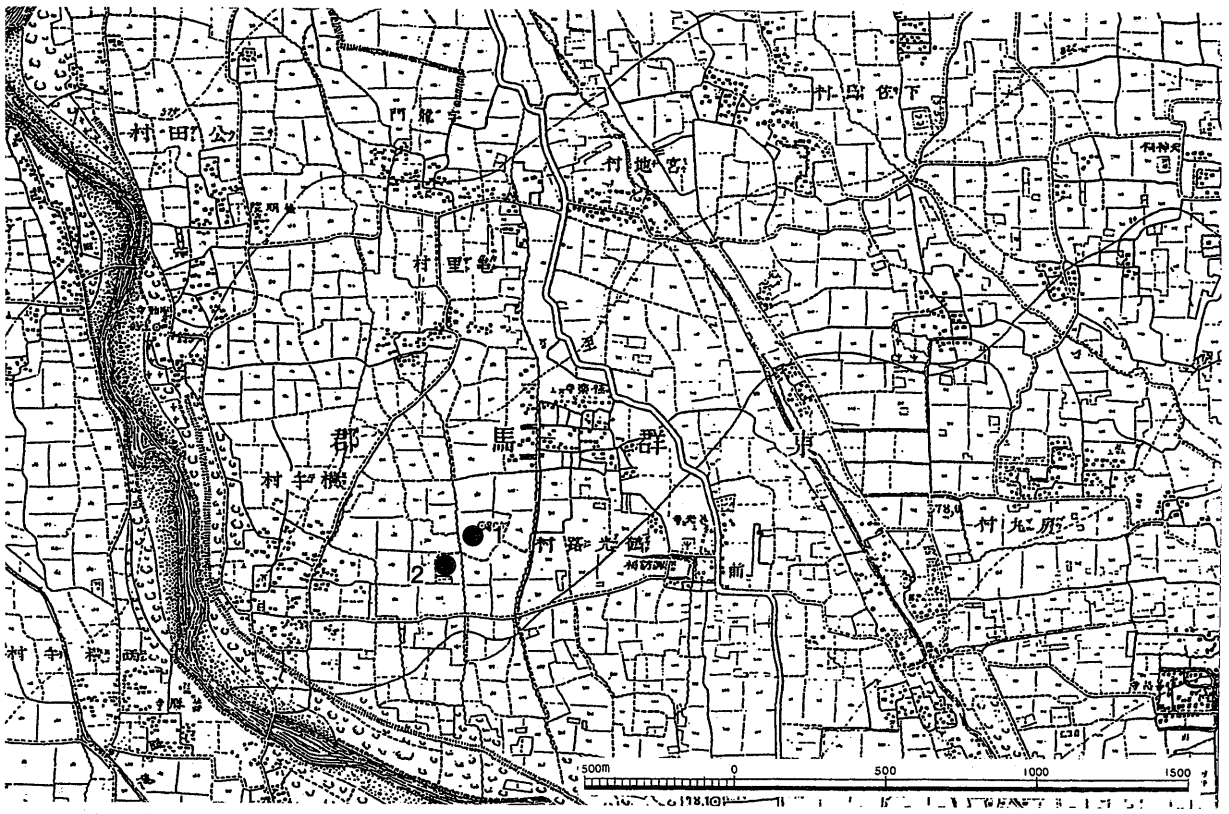
近世では、1783年（天明3年）に浅間山が噴火し、テフラ（As-A）が降下した。被災後の耕地復旧は、テフラを除去し坑に埋めた痕跡が本遺跡でも確認されている。

表1　周辺遺跡

No	遺跡名	縄文時代	弥生時代	古墳時代					奈良・平安時代			中・近世		備考
				集落	水田			その他	集落	水田	その他	城館	その他	
					As-C	FA	FP			As-B				
1	亀里銭面Ⅱ遺跡	遺物出土								○				
2	亀里銭面遺跡	遺物出土								○		?		
3	宿阿内城内遺跡											○		
4	川曲遺跡			○										
5	東田遺跡			○										
6	宮地中田遺跡									○				
7	公田東遺跡			○	C混			C混畠	○	○		○	集落	
8	浅間神社古墳							古墳						
9	西横手遺跡群			○	C下・C混		○						墓坑	
10	横手早稲田遺跡			○		○	○	旧河道		○	土坑・溝		水田	剣形石製品
11	横手井戸南遺跡			○		○	○	土坑・溝	○	○		○	水田・畠	
12	亀里平塚遺跡					○				○		○	水田	
13	横手宮田遺跡						FP混			○				
14	横手湯田Ⅴ遺跡	遺物出土				○	○			○			水田	
15	横手湯田遺跡			○	○	○	○	As-C下溝		○	土坑	○	水田他	
16	横手湯田Ⅱ遺跡	遺物出土				○				○			土坑・溝	
17	鶴光路練引遺跡									○	土坑・溝			
18	西田Ⅲ遺跡							溝		○	柵列		井戸・溝	
19	西田遺跡				○	○			○	○			墓・溝	
20	徳丸高堰遺跡	包含層										○		
21	徳丸仲田遺跡	包含層		○	C混	○			○	○	墓・井戸	○	墓・溝	隆起線文土器
22	徳丸仲田Ⅱ遺跡			○				土坑・溝	○	○		○		
23	鶴光路榎橋Ⅱ遺跡								○					
24	徳丸高堰Ⅲ遺跡								○				土坑・溝	



第１図　遺跡の位置と周辺遺跡



●1　亀里銭面Ⅱ遺跡
●2　亀里銭面遺跡

第２図　遺跡の位置

第３章　調査の方法と経過

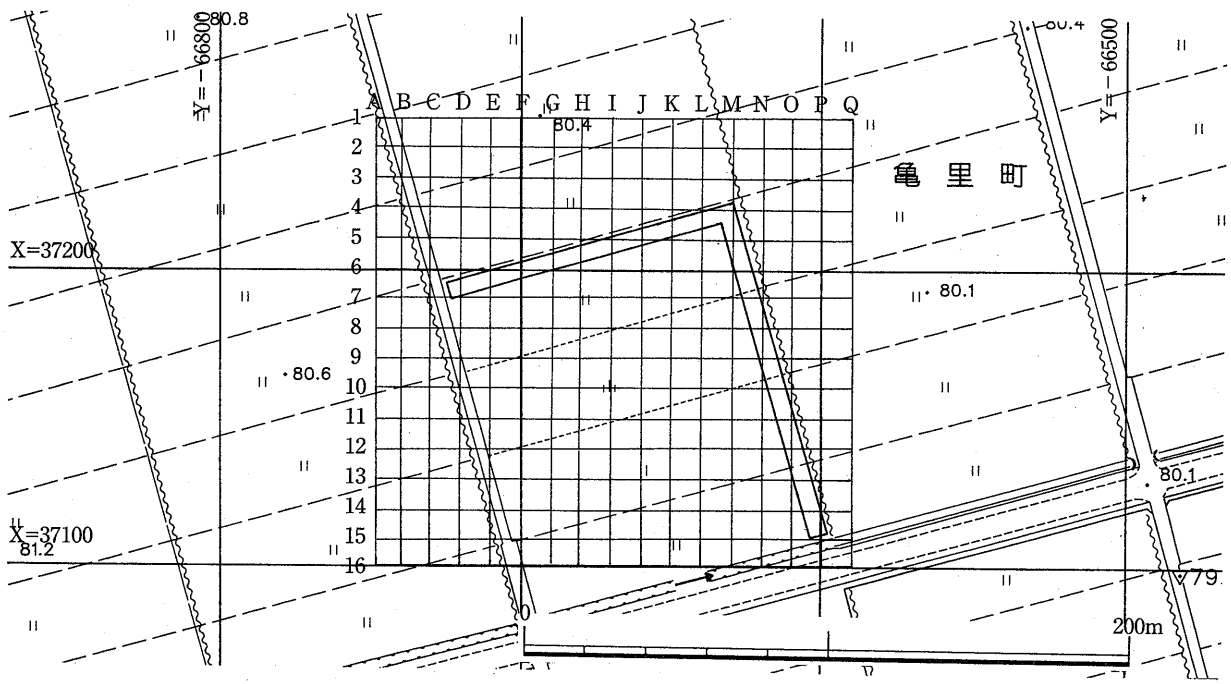
第１節　調査方法

調査区内に10×10m の方眼網を被せ、これを基準とすることにした。方眼網の基点は、国家公共座標第Ⅸ系 X=37,250、Y=－66,750とし、東に向かってアルファベット大文字を A から、南に向かってアラビア数字を１から付していくことにした。

図面の縮尺は1/20、1/40、1/100を基本とした。

写真撮影は、35mm（白黒・カラーリバーサル）を使用し、遺跡の全体写真は航空撮影で行った。

遺物の取り扱いについては、すべて水洗・注記を行ない、報告書に掲載する遺物に関しては、図化することにした。



第３図　調査範囲とグリッド設定図（S=1/2,500）

第２節　調査経過

（平成12年11月21日～平成13年3月16日）

平成12年

11月　下旬　　発掘に先立って現況写真を撮影する。施設の設置・器材の搬入を行ない、調査範囲の設定後、重機により表土除去作業を開始する。

12月　上旬　　表土除去作業を終了し、人力による平安時代後期水田跡の掘り下げ作業を開始する。

　　中旬　　平安時代水田跡の調査終了後、空撮、遺構全体図作製を行う。FA層面まで重機で掘削作業を行う。同層の堆積が希薄で範囲が極めて狭い範囲に限定されることが判った。このため状況撮影を行い、As-Cが混入する土層の下面まで、重機で掘削することにした。

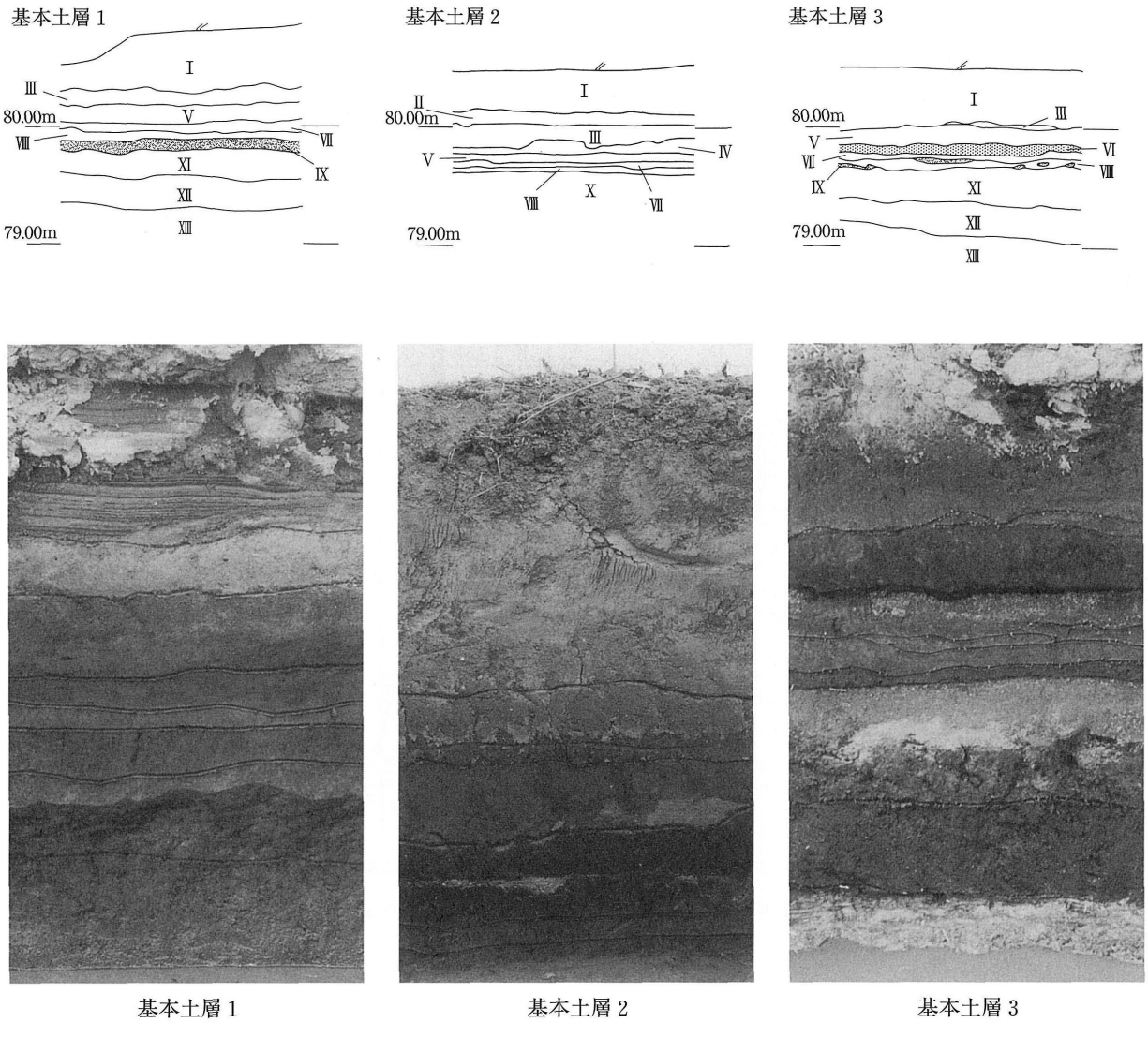
　　下旬　　同層までの人力による遺構確認・掘り下げを行い、さく状遺構などを検出する。空撮・遺構全体図作製後、トレンチを掘り下げ、下面から遺構・遺物が存在しないことを確認する。施設・器材を撤去・搬出し現地における調査を終了した。

平成13年

１～３月　　整理作業を行う。

第3節　基本土層

当初、遺構の検出を予想した3つの鍵層は、Ⅴ層（As-B）、Ⅸ層（FA）、それにAs-Cを混入する土層で、そのうち遺構を確認したのは、Ⅸ層を除く上下2層の下面であった。As-C混土層は遺跡全体に広がっていたが、Ⅹ層の表面に厚さ3cm未満で薄く堆積していた。



基本土層1　　基本土層2　　基本土層3

Ⅰ層	黒褐色土	表土	粘性弱い。しまり弱い
Ⅱ層	灰黄褐色土	現代耕作土	粘性弱い。しまり弱い
Ⅲ層	褐色砂質土		粘性弱い。しまり強い
Ⅳ層	暗褐色砂質土		粘性弱い。しまり強い
Ⅴ層	黒褐色砂質土		粘性弱い。しまり強い
Ⅵ層	As－B		粘性弱い。しまり強い
Ⅶ層	黒褐色砂質土		粘性強い。しまり強い
Ⅷ層	灰黄褐色シルト質土		粘性強い。しまり強い
Ⅸ層	FA		粘性強い。しまり強い
Ⅹ層	暗褐色土		粘性普通。しまり強い 上面2～3cmにはAs－Cが多量に入る
Ⅺ層	にぶい黄褐色粘質土		粘性強い。しまり強い。
Ⅻ層	黒褐色シルト質土		粘性強い。しまり強い。
ⅩⅢ層	灰色シルト質土		粘性強い。しまり堅緻。

第4図　基本土層

第４章　検出された遺構と遺物

調査では遺構確認面を２面検出した。As-C 混土層下面と、As-B 下面である。前者からは主にさく状遺構が、後者からは水田跡が検出された。この他奈良・平安～近世に至る遺構として土坑４基、溝11条が確認された。また遺物については本書に記した縄文時代の石鏃のほかに、古墳時代前期～近世までの遺物が整理箱１箱分出土している。

第１節　奈良・平安時代

(1)　１号さく状遺構（第６図／図版２）

遺跡から検出されたさく状遺構は１面のみで、As-C 混土層下で検出された。調査区の北西側 H-5に位置し、北端は調査区外となっており、他の遺構との重複はない。長軸が6.60m、短軸が1.35～2.70m、深さは６～８cm、小溝が広がる面積は77.34m^2 である。畝山のような盛り上がりは認めらなかった。小溝間の幅は５～30cm、方位は N-80～90°-E で、底面は起伏が著しい。埋没土は、シルト質の灰黄褐色土で、第Ⅷ層にきわめて類似しており、調査区北壁で両者を比較してみたが、遺構の掘り込みは不明瞭であった。

遺物は出土していない。

(2)　11～13号溝（第７図／表２／図版２）

いずれも、１号さく状遺構同様にⅩ（暗褐色土）～XI（にぶい黄褐色土）層上面から検出された。

11・12号溝の覆土は暗褐色土で、Ⅹ層に類似しており、同層から掘り込まれているようであるが、立ち上がりは不明瞭である。南北に走向する11号溝の南端は、東西に走向する12号溝の西端付近で T 字状につながった状態で検出されたが、両者の覆土に差異はなく、同時期の遺構である可能性が高い。

13号溝の第Ⅹ層下から検出されている覆土は、シルト質の暗褐灰色土である。

溝内から遺物は出土しなかった。

(3)　平安時代後期水田跡（第８・９図／表２／図版２～４）

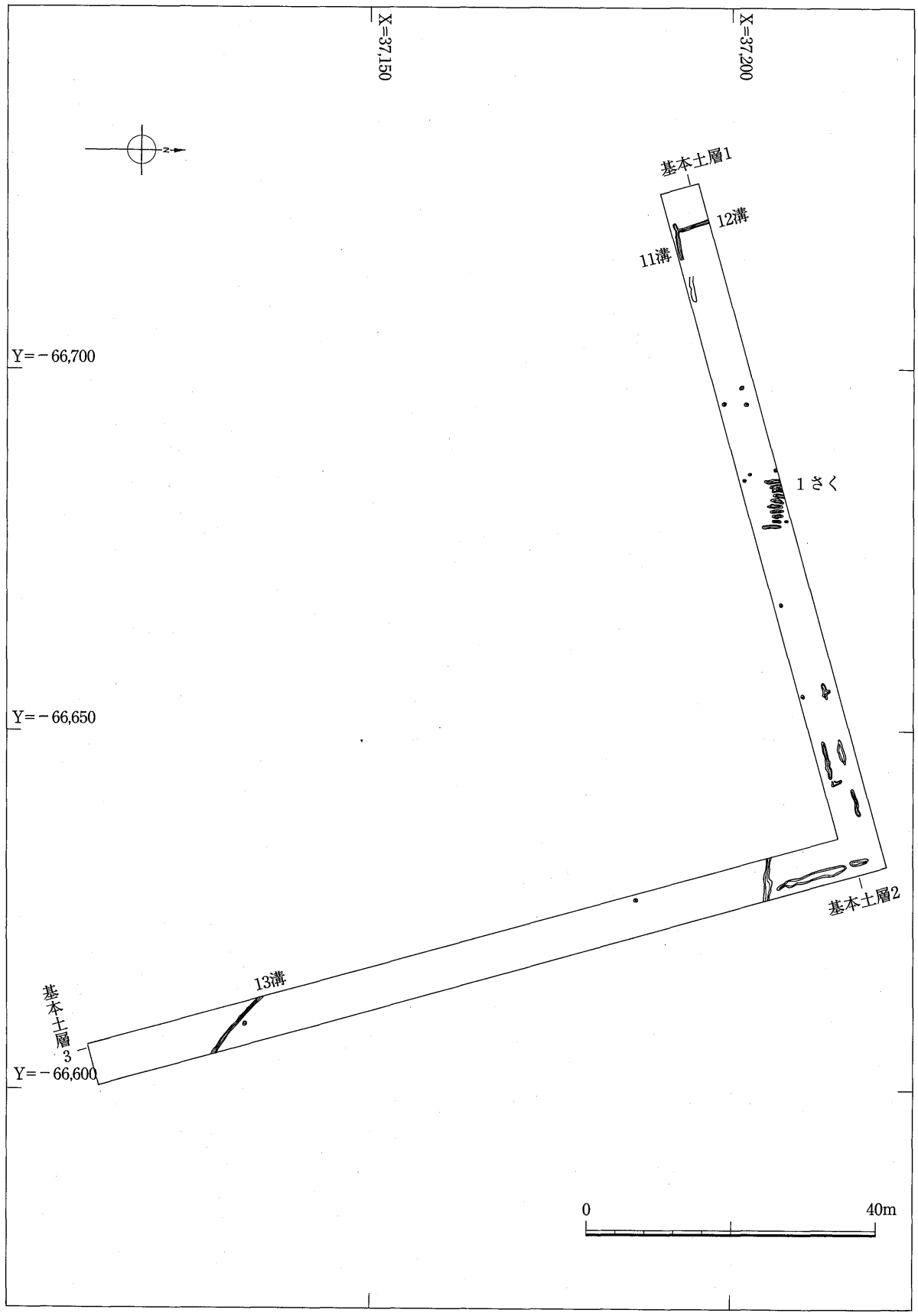
水田跡は、As-B に埋没して検出された。同層は調査範囲のほぼ全域を覆っているが、北西に向かうほど残りは悪くなる。調査範囲の標高は調査区北西端で80.00m、Ｌ字に南東へ折れ曲がる北東角で79.80m、南東端で79.57m となっており、南北間の距離は100m ほどあるが、水田面の比高差は0.23～0.47m と、南に向かって緩やかに傾斜していくようである。

水田面に伴う水路跡は、５～７・10号溝の４条で、南北に走向する５・６号溝と、東西に走向する４・10号溝とがある。地形から流路は、前者が北から南へ、後者が西から東へ進むようである。

畦畔は26条検出された。南北に走向する畦畔のうち、方位 N-88°-W～N-0°-W が比較的多い。６号溝を挟んで対になり南北に走向する３・４号畦畔、幅が広く南北に走向する５号畦畔、５号溝を挟んで対になり東西に走向する17・18号畦畔、その延長にある16号畦畔、これらはいずれも調査範囲の北側で検出された。形状から大畦畔の可能性が考えられる。

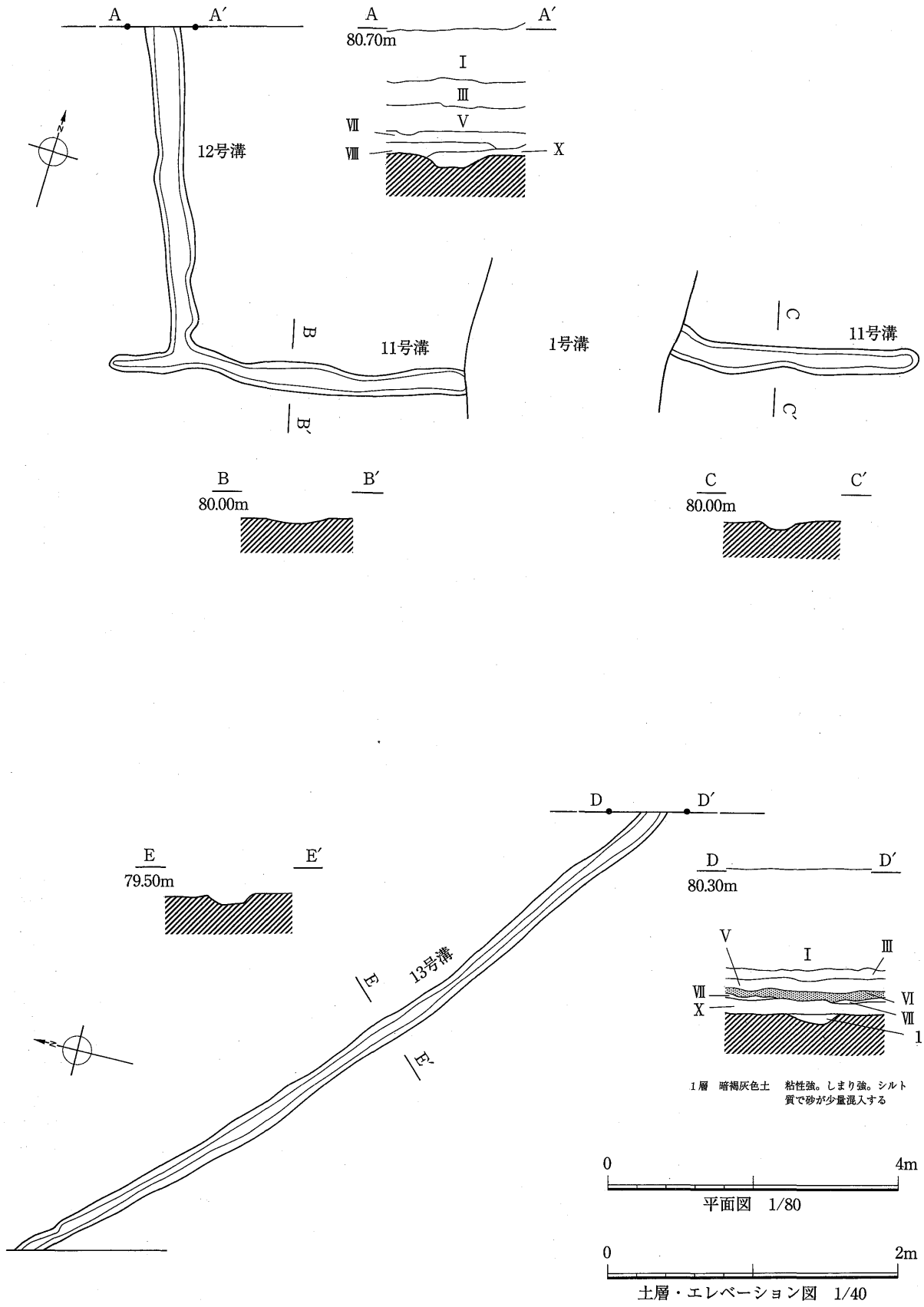
水口は３個所あり、いずれも調査区東側で検出された。

水田面の凹みの形状は、明瞭ではないがいずれも内部に As-B 軽石が混入していた。凹みには15cm 前後の円形で比較的走向をたどれるものと、長軸20cm 以上の長楕円形や不定形のものがあり、深さは両者とも



第5図　遺構全体図(1)（S=1/800）

第6図　1号さく状遺構



第7図　11・12・13号溝

2～5cmで、形状から、前者については馬の蹄跡と推定される。

遺物は土師器小片が3点出土している。

第2節　中・近世（第11・12図／表2／図版3・4）

土坑4基、溝4条が検出された。

1号土坑は4号溝を掘りこんでいて内部にAs-Aが大量に混入している。2～4号土坑・1～4号溝はAs-B軽石面を掘り込んでいる。各土坑は長径0.75～2.35mで、深さは8～15cmあり、平面形状は円形・楕円形などであった。

1～4号溝は、調査区北側西寄りにまとまり、いずれの流路も調査範囲内を北から南へ向かっている。幅0.34～2.70mで、深さは2～47cmである。

遺物は、1号溝からのみ検出されており、備前系陶器や墨絵染め付けのある白磁など、中～近世の陶磁器片12点であった。

第3節　遺構外出土遺物（第13図／図版4）

遺物は石鏃が1点である。チャート製の凹基無茎鏃で、裏面の調整は、基部を2回に分けて行った後、右側縁部を再調整している。

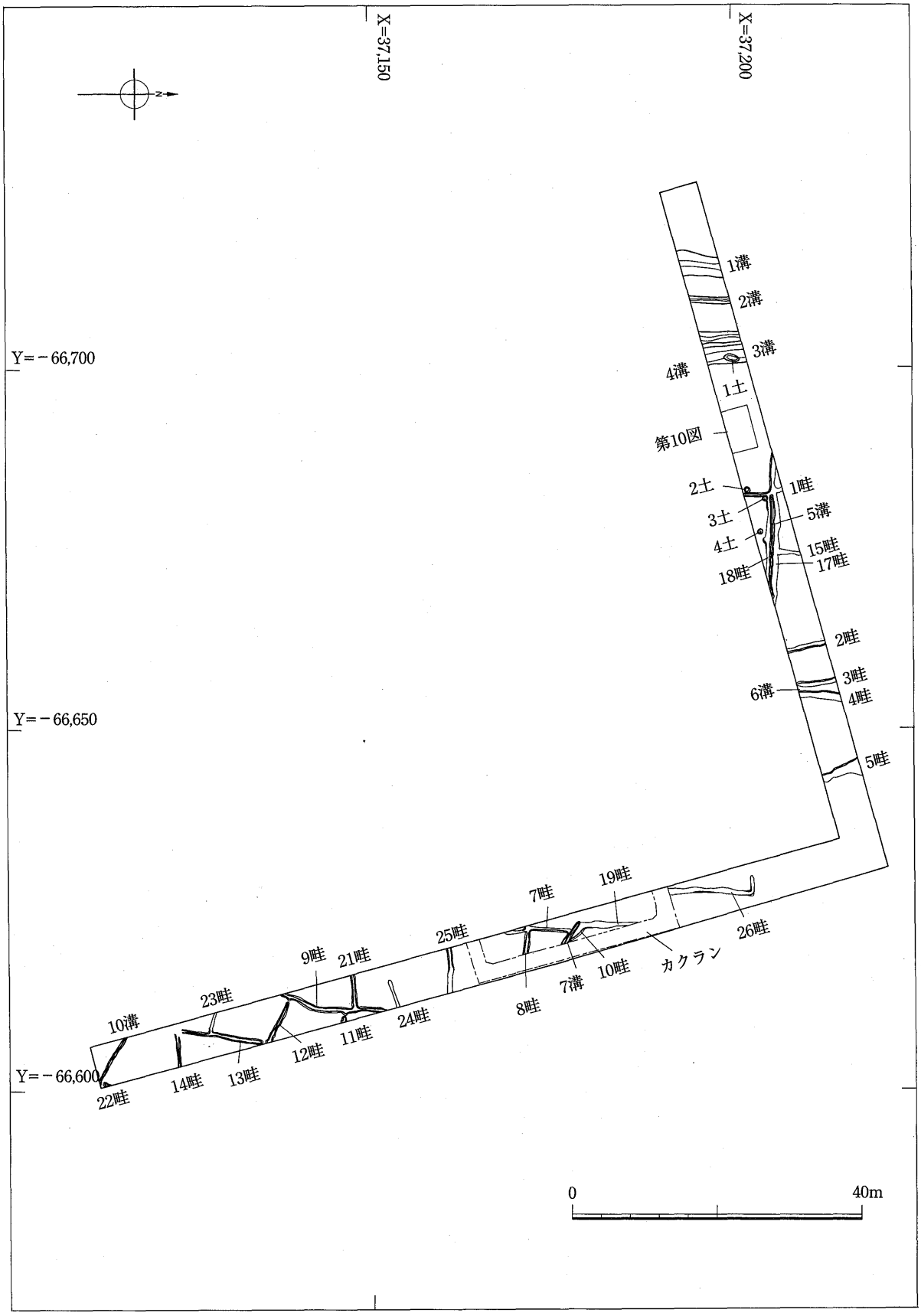
その他古墳時代前期に伴うものと思われる土師器小片が2点、奈良・平安時代と思われる須恵器片が1点、近世陶磁器片が6点、時期不明の土師器片が2点出土している。

第5章　まとめ

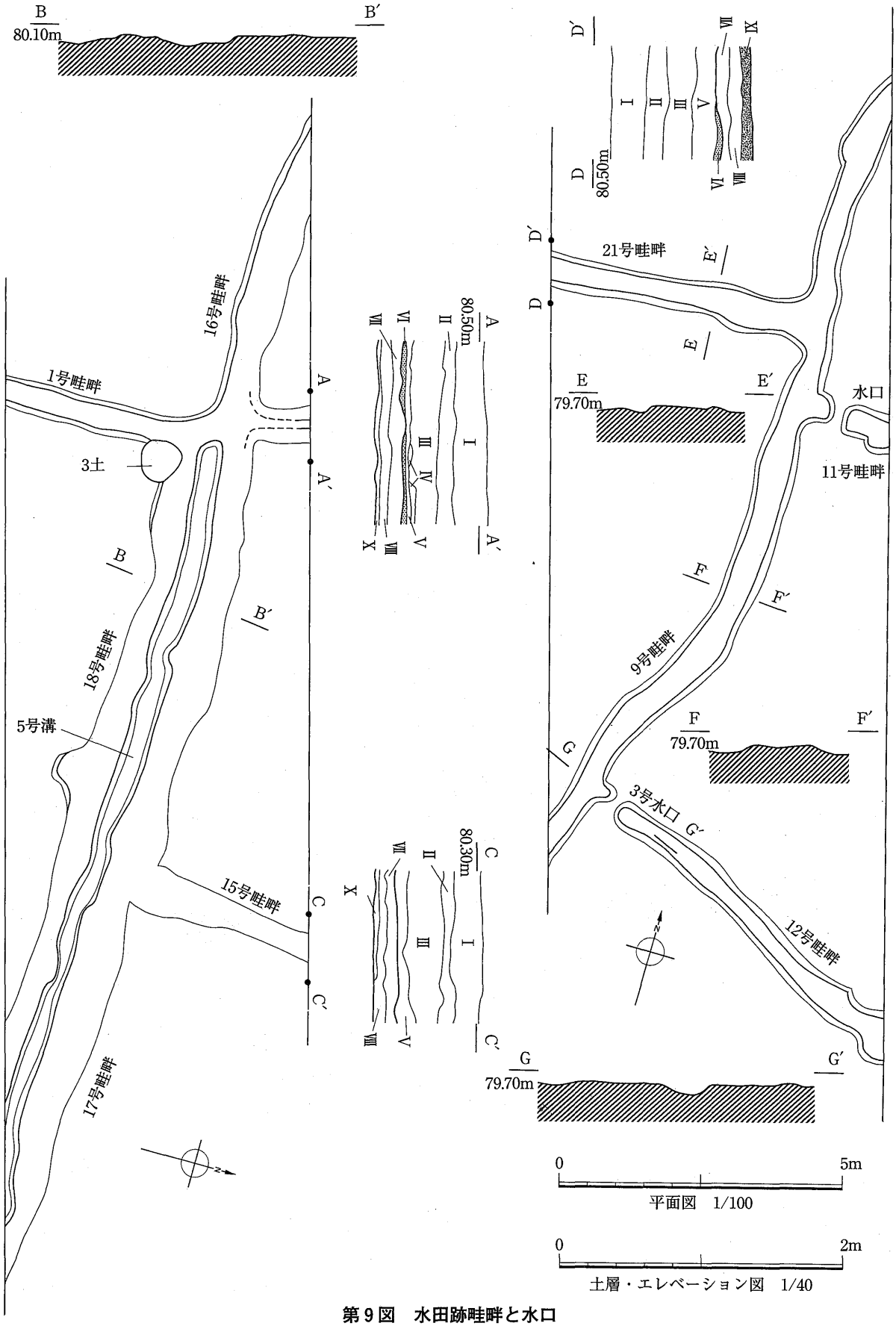
奈良・平安時代のAs-B以前の耕作と思われるさく状遺構は、畠跡や畝状遺構として周辺遺跡でも報告されている。さく状遺構は帯状に長い分布範囲をもつ傾向がある。調査範囲が極めて狭小ながら、このことは本遺跡にもあてはまるようである。

遺跡の主体を占める平安時代後期水田跡の形状と田積は、調査範囲が狭小なため全貌は明らかではないが、調査区北側東寄り付近と東側南寄り付近の水田区画（1・7・9・11～13・15・16号畦畔に挟まれた部分）が比較的遺存状態が良い。東西8m、南北6～8mの方形もしくは長方形の区画で、田積は50m^{2}前後だったことが判明する。また第4章第1節でも述べたように、調査範囲内の畦畔の南北走向はN-0°主体で、周辺で検出された水田畦畔の走向とほぼ同様の傾向をみせている。

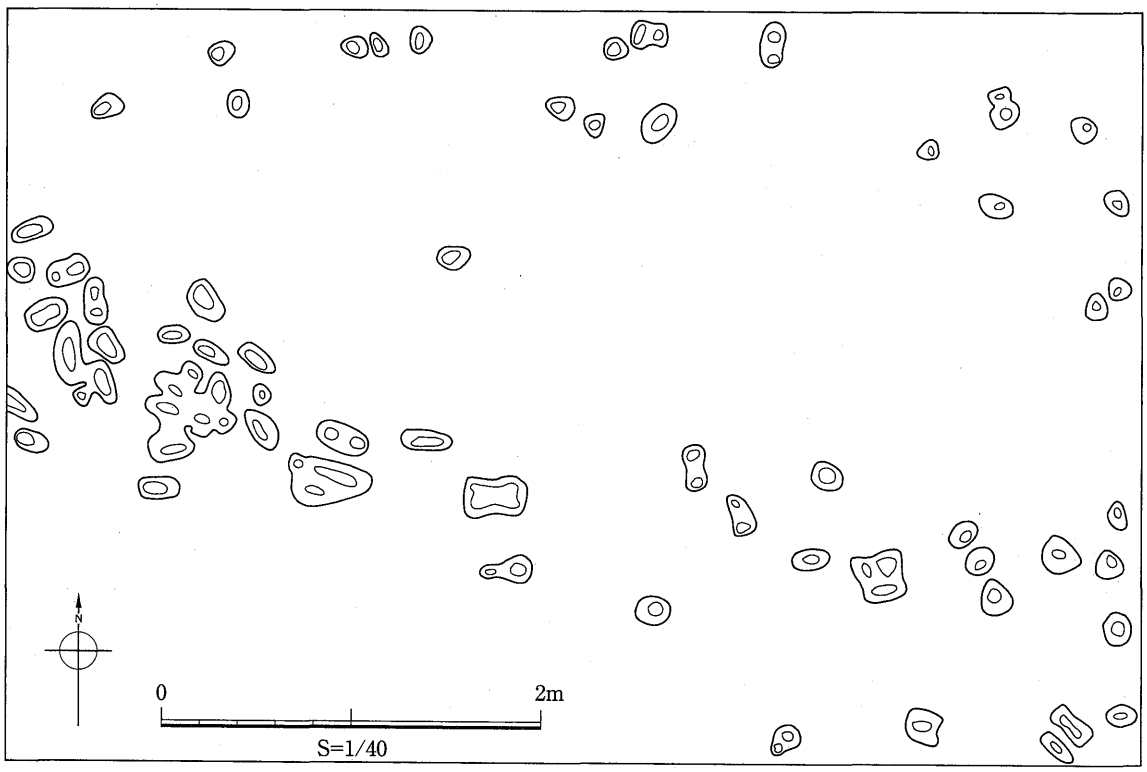
以上のことから現在、横手・亀里・新堀・鶴光路などの集落が営まれる微高地に囲まれた低地に立地する本遺跡では、平安時代後期においては水田が営まれていたが、それ以前は畠とも推定されるさく状遺構の状態であったことが判明した。



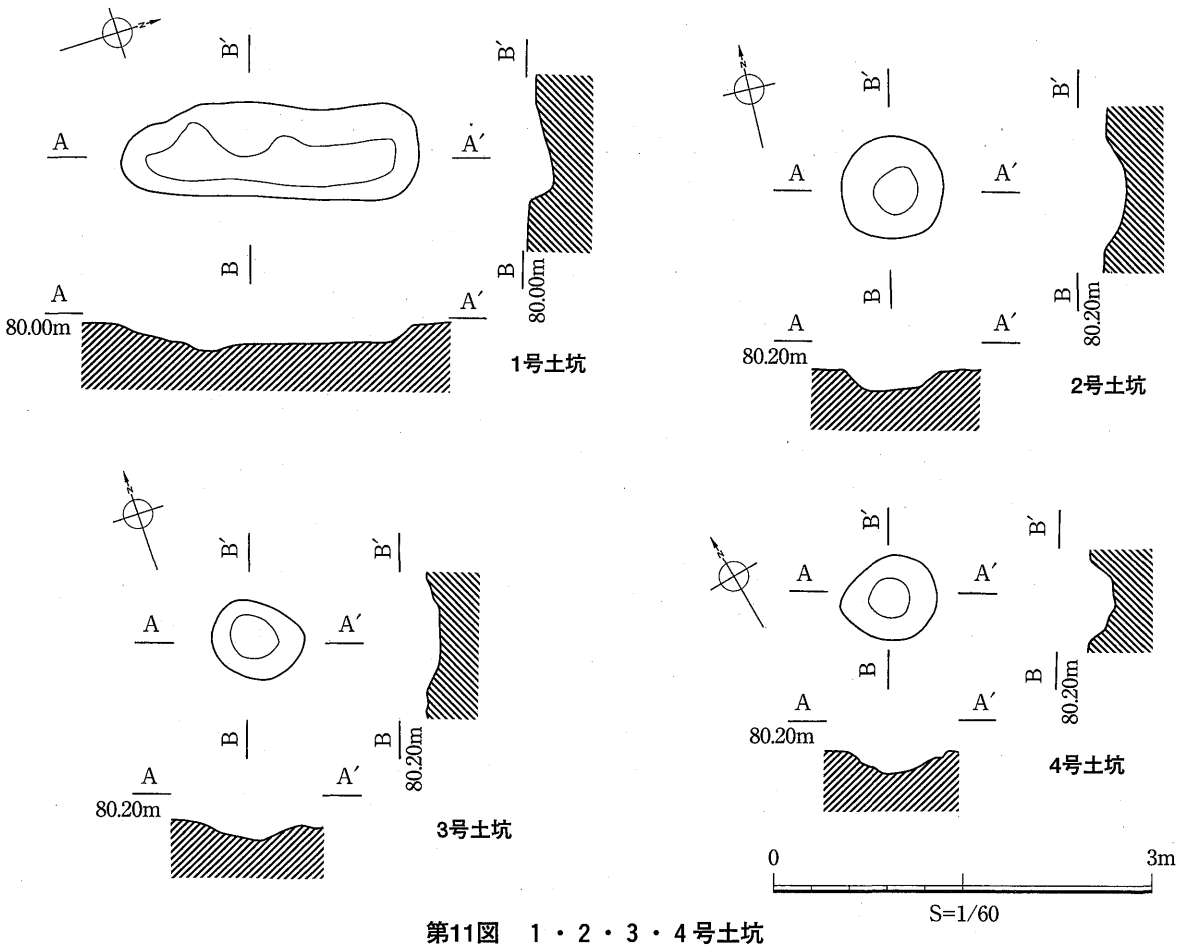
第8図　遺構全体図(2)（S=1/800）



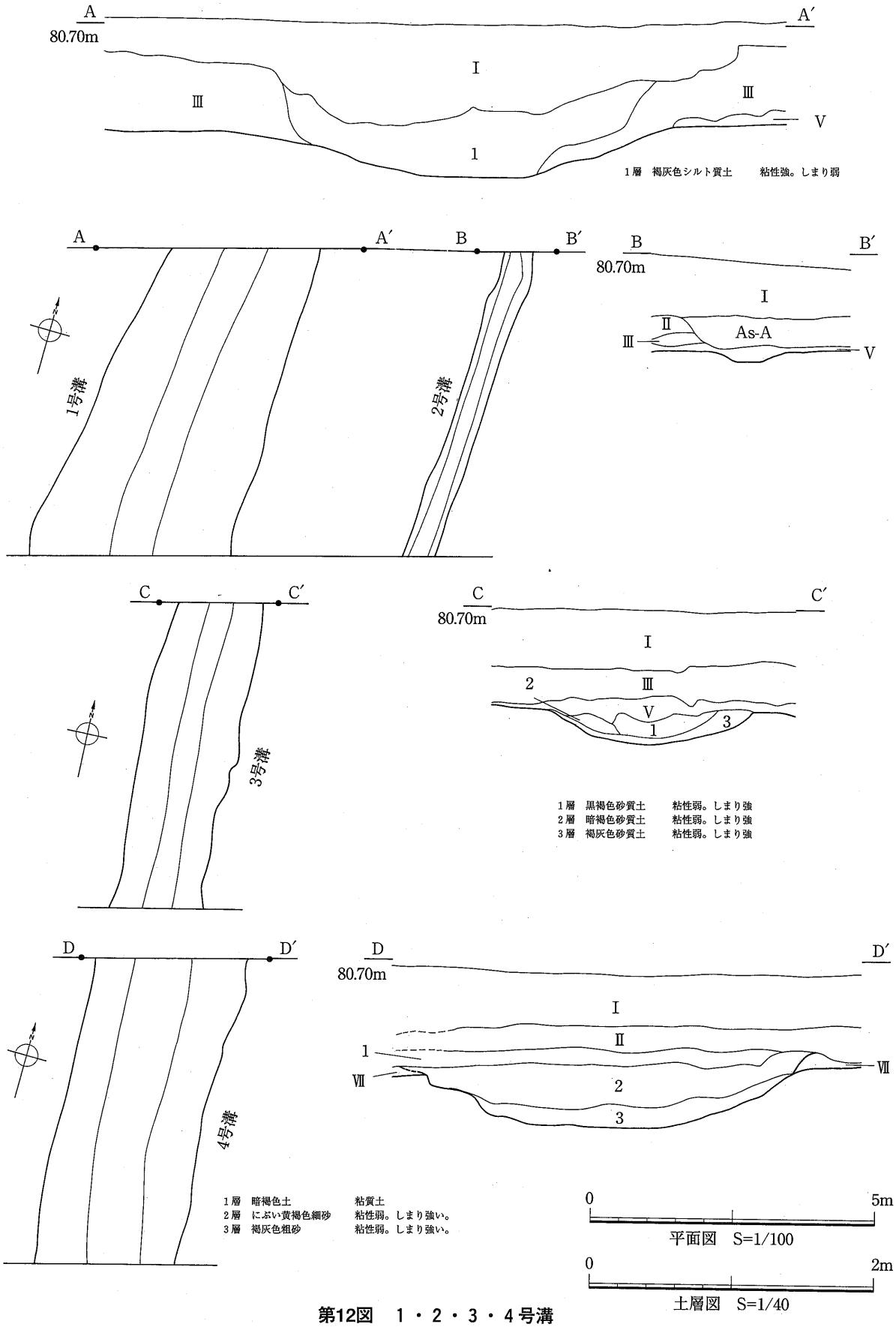
第9図　水田跡畦畔と水口



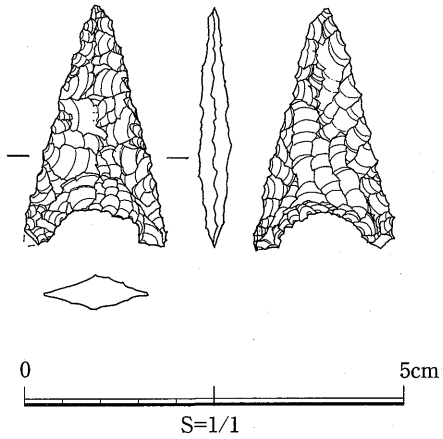
第10図　水田跡の凹凸面



第11図　1・2・3・4号土坑


A
A′
80.70m
I
Ⅲ
Ⅲ
V
1
1層　褐灰色シルト質土　　粘性強。しまり弱
A
A′
B
B′
1号溝
2号溝
B
B′
80.70m
I
Ⅱ
Ⅲ
As-A
V
C
C′
3号溝
C
C′
80.70m
I
2
Ⅲ
V
1
3
1層　黒褐色砂質土　　粘性弱。しまり強
2層　暗褐色砂質土　　粘性弱。しまり強
3層　褐灰色砂質土　　粘性弱。しまり強
D
D′
4号溝
D
D′
80.70m
I
Ⅱ
1
Ⅶ
Ⅶ
2
3
1層　暗褐色土　　粘質土
2層　にぶい黄褐色細砂　　粘性弱。しまり強い。
3層　褐灰色粗砂　　粘性弱。しまり強い。
0
5m
平面図　S=1/100
0
2m
土層図　S=1/40

第12図　1・2・3・4号溝



石鏃	長3.2cm	幅1.9cm	厚0.4cm
石材：チャート			重1.63g

第13図　出土遺物

表２　遺構一覧表

畦畔

番号	上幅 m	下幅 m	高さ m	走向方位
1号畦畔	0.40	0.60	0.05	N-0°
2号畦畔	—	0.80	0.06	N-14°
3号畦畔	—	0.70	0.03	N-5°-W
4号畦畔	—	1.15	0.04	N-6°-E
5号畦畔	—	2.80	0.04	N-28°-W
6号畦畔	—	0.90	0.03	N-0°
7号畦畔	—	0.55	0.02	N-0°
8号畦畔	0.55	0.80	0.04	N-86°-W
9号畦畔	0.65	0.80	0.09	N-10°-E
10号畦畔	0.70	0.90	0.06	N-55°-W
11号畦畔	0.52	0.72	0.04	N-85°-W
12号畦畔	0.52	0.70	0.09	N-65°-W
13号畦畔	0.50	0.60	0.07	N-10°-E

番号	上幅 m	下幅 m	高さ m	走向方位
14号畦畔	0.33	0.58	0.04	N-85°-E
15号畦畔	0.38	0.58	0.04	N-0°
16号畦畔	—	0.25	0.03	N-88°-W
17号畦畔	—	0.94	0.02	N-88°-W
18号畦畔	—	1.10	0.05	N-88°-W
19号畦畔	—	1.00	0.03	N-0°
20号畦畔	0.35	0.40	0.04	N-55°-W
21号畦畔	0.60	0.78	0.05	N-86°-E
22号畦畔	0.30	0.40	0.04	N-24°-E
23号畦畔	—	0.40	0.03	N-75°-W
24号畦畔	—	0.50	0.03	N-71°-E
25号畦畔	0.42	0.62	0.05	N-89°-E
26号畦畔	—	0.50	0.02	N-0°

土坑

番　号	位置	形　状	規模　m			備　　考
			長径	短径	深さ	
1号土坑	F6	楕円形	2.35	0.54	0.14	4号溝を切る。As-A を大量に混入
2号土坑	H5	円形	0.85	0.78	0.15	水田面を切る。As-B を大量に混入
3号土坑	H5	楕円形	0.75	0.57	0.08	水田面を切る。As-B を大量に混入
4号土坑	I5	円形	0.75	0.65	0.14	水田面を切る。As-B を大量に混入

溝

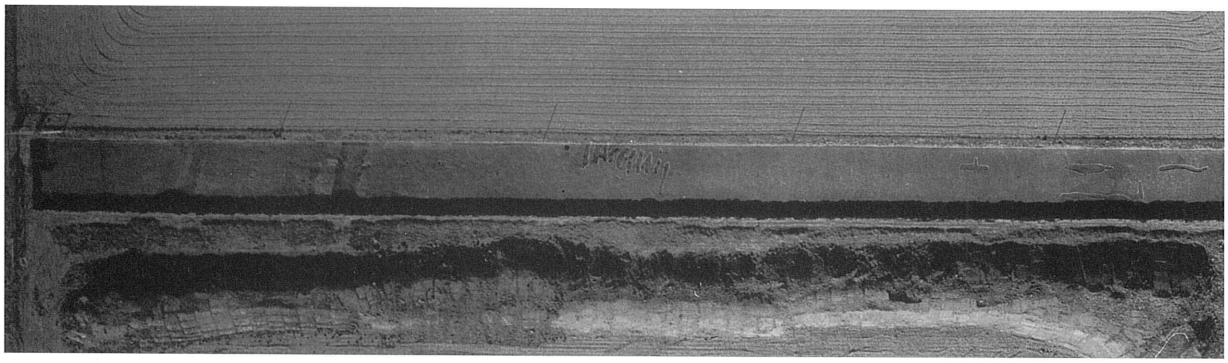
遺構名	位置	方位	上幅 m	下幅 m	深さ m	備　　考
1号溝	E6	N-0°	3.40	0.78	0.36	水田面を切る。陶磁器片12
2号溝	F6	N-0°	0.58	0.26	0.02	水田面を切る
3号溝	F6	N-0°	1.72	0.36	0.31	水田面を切る
4号溝	F6	N-0°	2.70	1.04	0.47	水田面を切る
5号溝	I5	N-88°-W	0.52	0.32	0.05	水田に伴う
6号溝	K4	N-0°	1.62	1.52	0.10	水田に伴う
7号溝	N8	N-55°-W	0.50	0.34	0.02	水田に伴う
欠番	—	—	—	—	—	—
10号溝	P14	N-60°-W	0.44	0.26	0.03	水田に伴う
11号溝	E6	N-74°-E	0.42	0.27	0.02	As-C 下。12号溝との新旧不明
12号溝	E6	N-0°	0.48	0.30	0.04	As-C 下。11号溝との新旧不明
13号溝	P12	N-50°-W	0.32	0.10	0.07	As-C 下

図版1　遺跡全景

遺跡周辺　　矢印は遺跡位置を示す

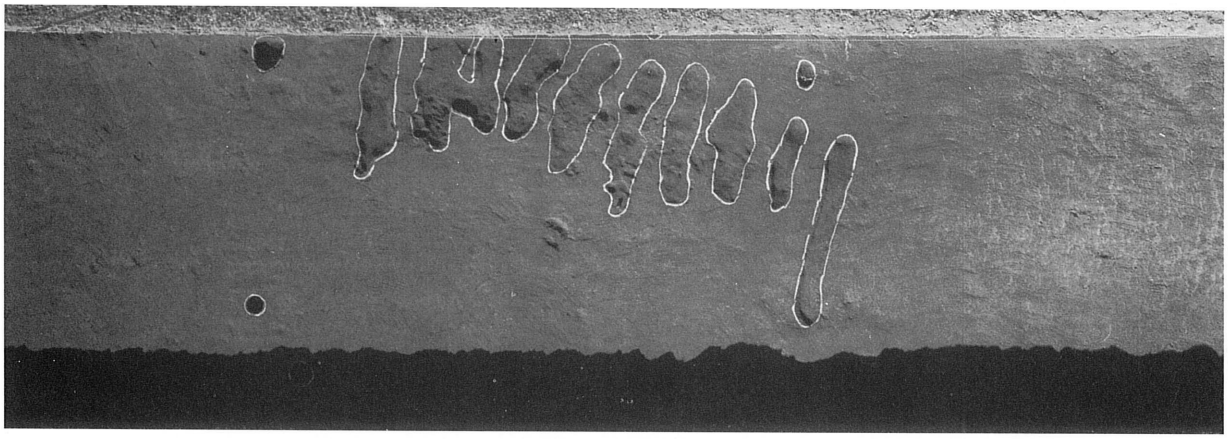
遺跡遠望（北から）

図版2　遺構（北・東側全景　さく状遺構）

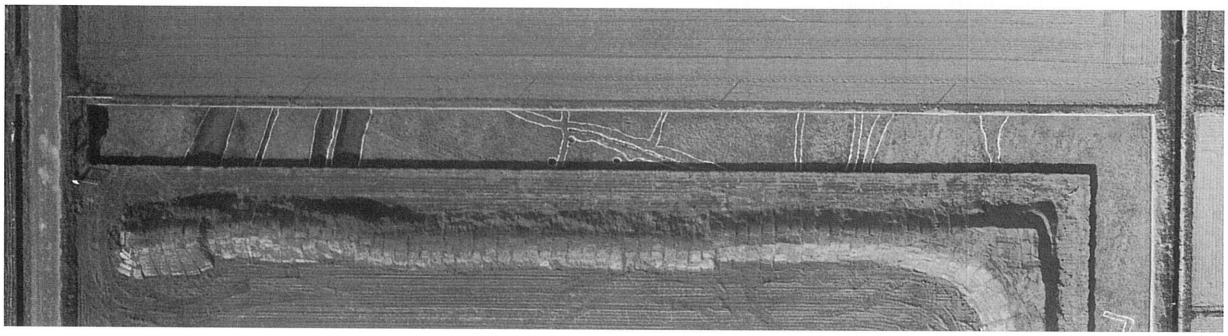


調査区北側（1）

調査区東側（1）

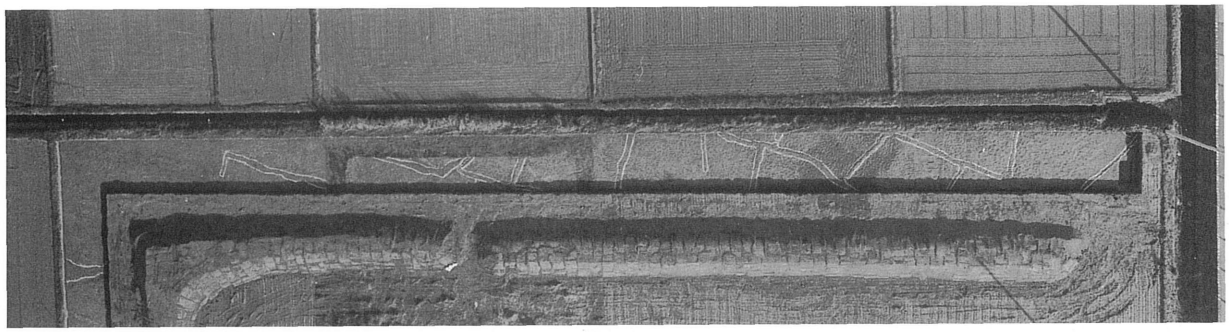


1号さく状遺構

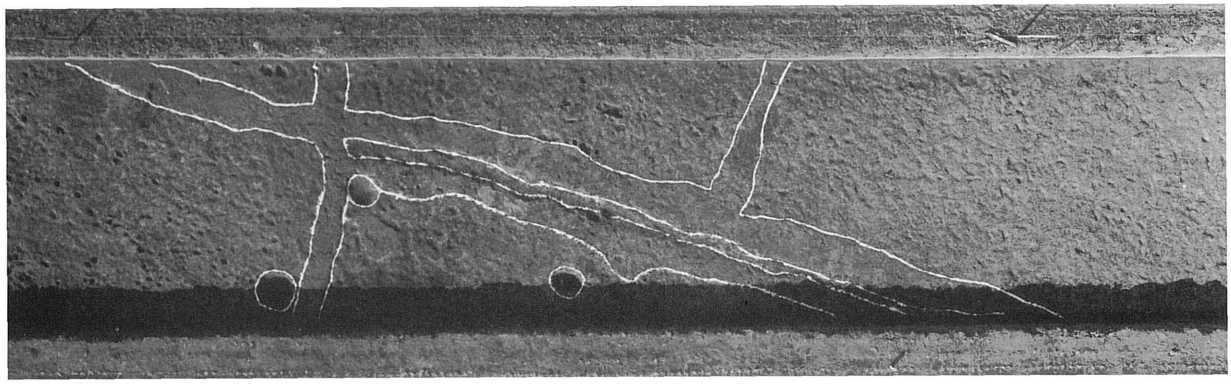


調査区北側（2）

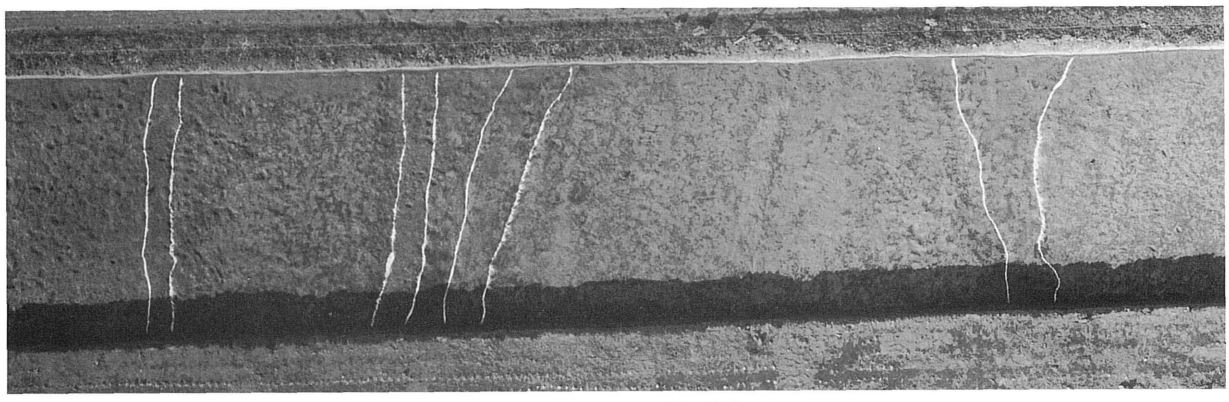
図版3　遺構（東側全景・土坑・水田）



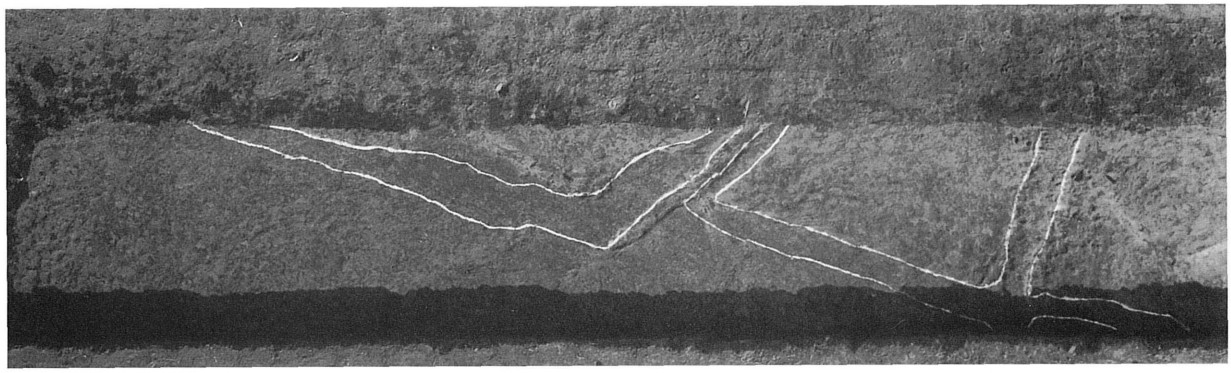
調査区東側(2)



2・3・4号土坑付近

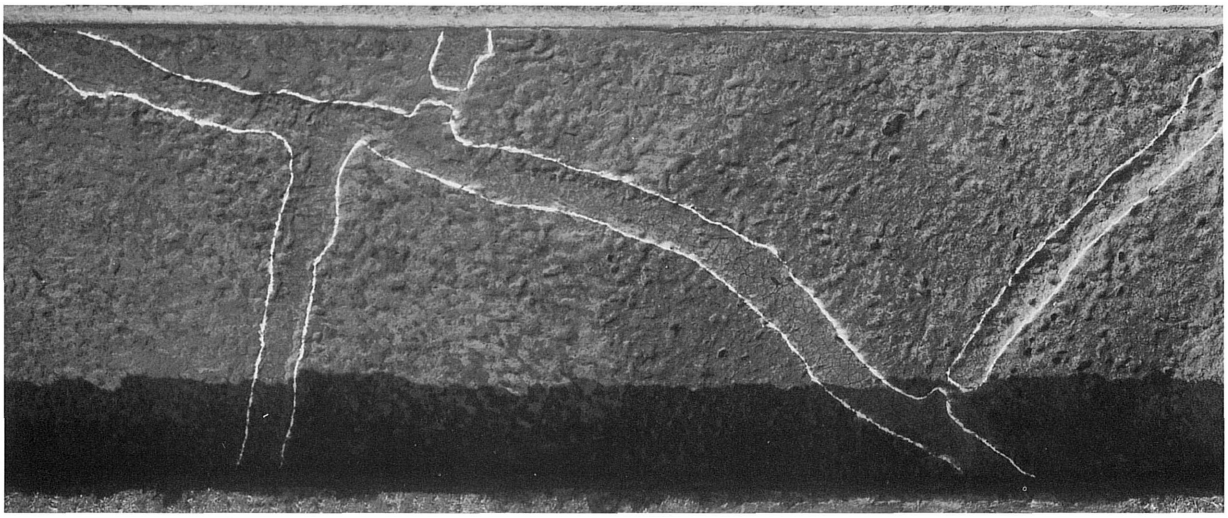


2・3・4・5号畦畔

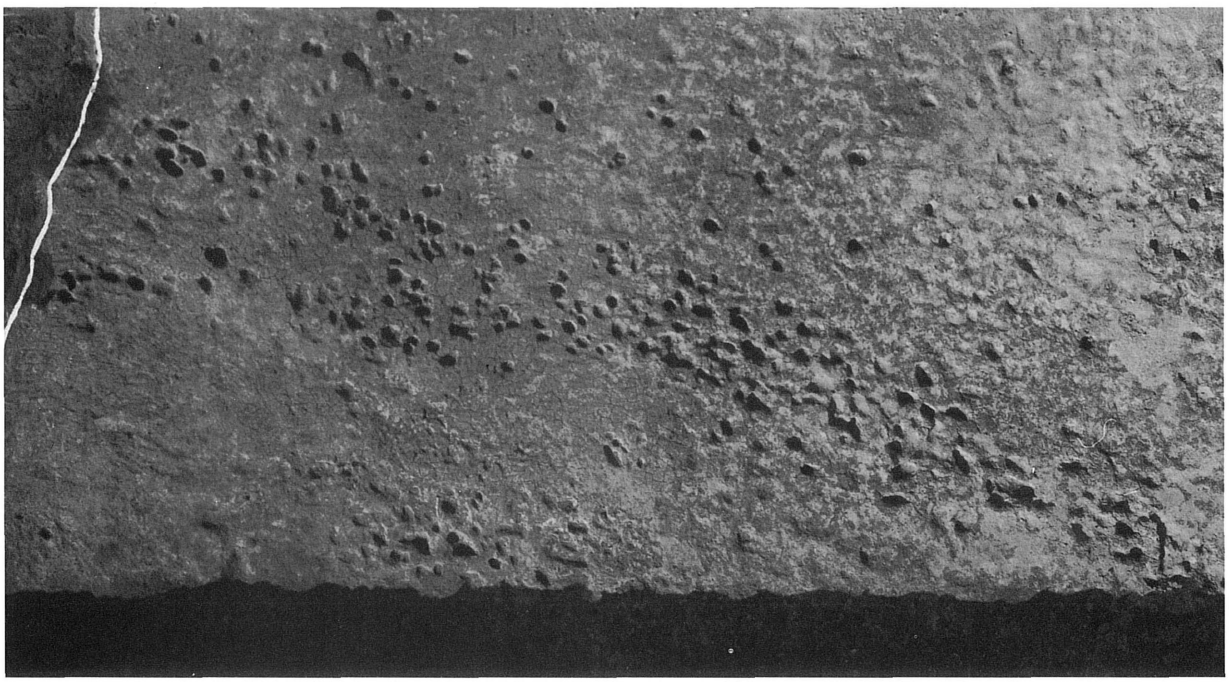


7号畦畔付近の水口

図版4　遺構（水田・土坑）・出土遺物

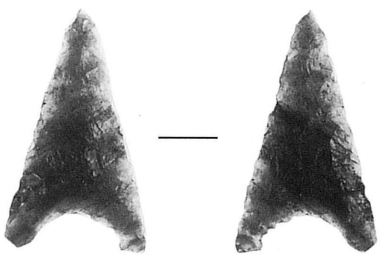


9号畦畔付近の水口



水田跡の凹凸（上が北）

1号土坑（北から）



出土遺物

抄　　録

フリガナ	カメサトゼニメンⅡイセキ
書名	亀里銭面Ⅱ遺跡
副書名	産業振興支援施設造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	大越直樹・眞塩明男
編集機関	山武考古学研究所　／〒286-0045　千葉県成田市並木町221　TEL　0476－24－0536(代)
発行機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　／〒371－0007　群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦2001年３月23日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カメサトゼニメンⅡ 亀里銭面Ⅱ	グンマケンマエバシシカメサトマチ 群馬県前橋市亀里町 874番地外	10201	12G49	36°19′ 57″	139°05′ 30″	20001121 ～ 20010316	1,282m^2	産業振興支援 施設造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
亀里銭面Ⅱ	水田跡 他	縄文時代 奈良・平安時代 中・近世	さく状遺構・水田跡 土坑４・溝11	石鏃 土師器・須恵器 陶磁器	As-B 軽石下水田跡

出土遺物及び図面等の取り扱いについて

項目		内容
水洗い		• 全点実施。
注記		• 遺跡略称（12G-49）、出土遺構（D：土坑、W：溝） • 土器細片については同様の内容を収納したビニール袋に明記した。
実測		• 遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳		• 遺物台帳・図面台帳・写真台帳があり、それぞれの資料の検索が可能であるよう作成した。
保管方法	出土遺物	• 出土遺物は、報告書掲載と未掲載に分け、コンテナに収納した。
	図面	• 遺構実測図と遺物実測図に分け、それぞれ図面ケースに収納した。
	写真	• 遺構写真は、モノクロ35mm、カラーリバーサル35mm、カラーネガ35mm、モノクロ６×６cm（空撮写真）の４種類がある。 • 遺物写真は、報告書掲載分についてのみモノクロ６×７cm フイルムを使用し、撮影を行った。

亀里銭面Ⅱ遺跡

印刷　平成13年３月16日
発行　平成13年３月23日

編集　山武考古学研究所　TEL0476-24-0536
発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印刷　(株)文化総合企画　TEL0476-93-0593